

電車を降りてやってきた所は、様々な娯楽施設やショップなどで賑わう繁華街で、海外のような街だった。そんな街の中心地にあるビルの地下のライブハウス……いや、4桁の人が入れそうなまるでコンサートホールだった。そこから聴こえる音楽に耳から全身にビリビリと、いや、ゾクゾクと震えて歌いたい欲が込み上げる。自然と、DJブースの前の観客が集まる所に足が進んだ。

「……凄いねっ」

「ああ……俺も、今すぐ歌いたいくらいだ」

壁に貼られたイベントポスターをチラリと見ると、歌うジャンルは自由でHIP-HOPやジャズ、ゴスペル、ヨードルなど本当に様々なもので構成されたタイムテーブルだった。皆自由に、楽しそうに歌ったり中には演奏しているシルエットもあり、こはね個人的にはそのポスターのデザインも間近でじっくり見たかったがそれ以上に大迫力のステージに釘付けだった。

こはね達同様4人のチームで全員の声が重なる時は勿論、ソロパートでも一人一人の声がガツンと全身に響く。その上で息のあったダンスはダイナミックながらも肩や腰で複雑な動かし方をしており技術の高さに圧倒される。ライブハウス全体を熱気で包むストリート音楽は、高揚感が止まらない。もっと聴きたい、知らない曲だが歌ってみたい。ただ、入ったタイミンが曲の終盤だったからか、殆ど聴けなかったのは残念だった。次はクラブタイムとなっていたため、密集していた観客達が多少まばらになった。僅かでも聴けた曲の事で話したいなと思いつきながら空いていた椅子に座ると、冬弥から話しかけられた。

「……小豆沢の推理、合っているのかもしれない」「ふえっ？」

突然冬弥から囁かれた言葉に、こはねは先程の自分の発言を脳内から掘り起こし、思い出した。

「俺は、このような活気あふれる外の世界や、自由な

音楽が……羨ましかった」

冬弥の過去。十年以上、クラシックの才に溢れる父のもとで厳しく育てられ、学校行事なども参加させてもらえず、他の人とは特殊な人生だったと本人も話していた。冬弥にとって家の外は、ストリート音楽は、新鮮で自分に色を見出してくれた世界だったのかもしれない。冬弥が求めていた『クラシックに囲まれないセカイ』だったのかもしれない。クラシック以外なら何でも良かったと聞いていたが、今は違う。街で、RAD WEEKENDを超えて、もっと広い世界で、4人で歌いたい！冬弥は勿論、こはねも同じ気持ちだ。

「彰人と出会ってから経験した何もかもが新鮮で、実際には触れた事が無かったものはどれも刺激的で」

「……最初は怖いって思っていたけど、あの街で杏ちゃんの歌を聴いた時、ドキドキしたなあ」

それぞれの相棒が手を差し伸べてくれたから出会え

た世界。今はこの4人が同じ夢に向かって突き進むチームだ。唯一無二の相棒がいたから知る事ができたのは間違いない。だが、その世界で歌う事を辞めなかったのは、こはねのあの時の言葉があったからだ。

『青柳君は、本当はどうしたいの？』

自分の胸に秘めている本当の気持ちを大事にしてほしい、そう言われているようだった。覚悟を決めてストリートで歌う事を決めたこはねの言葉はあの時の自分に重く響いた。それと同時に髪を切ってコンタクトに変え力強く冬弥に問うこはねが眩しかった。自分もそんな風に胸を張って彰人の隣で歌いたい、胸に込み上げた想いは言葉になって、4人の想いは重なった。

「俺の想いでできたセカイ……小豆沢があの時引き留めてくれたからこそ、今も俺が歌い続けられる。RAD WEEKENDを超えたい、今まで見たことのない景色を見たいと踏み出した想いが反映された場所なのかもしれない」

「……私も、初めてのSTAY GOLDの時に負けちゃってどうしようって悩んでいた時とか、私らしくいけっていつも青柳君が言ってくれて、大きな一歩を踏み出せたの！ 青柳君には励まされてばかりなのに、そう言ってくれるのっ……嬉しいなあっ」

勿論相棒や仲間、沢山の人のおかげで彼らはこれまで何度も葛藤しながら乗り越えられた。ただ、この2人がお互い相手にかけた言葉は、存在は、間違いなく自分の中で大きな影響を与えていた。

「……まさか、仲間という関係だけに収まらなくなっただのはビックリしたけどね」

「そうか？ 俺は、歌っている時も、そうではない時も、小豆沢と共にいる時間が楽しいって気持ち及早々にあったぞ。読書の話をする時、好きな物を口にしている小豆沢を見ている時、真剣な眼差しで写真を撮っている時、それから……」

（たっ、助けて杏ちゃん東雲くん……）

ライブハウスの雰囲気でこんな甘すぎる感情向けられると、いくら恋人とは言え過剰摂取で沸騰しそうだと、ここにいない2人に助けを求めている。多分彰人は『他所でやれ……』って言いそうではあるが。

流石にストップと言おうとした時、いつの間にかクラブタイムが終わって次の出演者が出てきた。見目麗しい男女だ。煌びやかな衣装を着た女性の透き通りながらも強い歌声から始まった。ジャンルはおそらくR & Bやソウルあたりと思われる。今は日本で歌っているが、彼らの夢のその先ではこうやって間近で世界中の音楽に触れる事が当たり前になるのだろう。曲名だけでも知りたいが、歌から聴こえてきたフレーズから情熱的な曲であることだけはわかった。近い距離で時折見つめ合う姿が絵になる。ちょっと気恥ずかしくなって視線を冬弥の方に向けると、何かを言いたげな様子だった。ステージはどこかムーディーな雰囲気ながらも情熱がこもった歌に大歓声だった。ただ、長居

をしても元の世界に戻る方法は見つからなさそうだったのでこのライブハウスを後にした。

地上に出て電車があった方へと向かう。さっきの曲何だったんだろうと2曲を調べたかったが今はスマホを使える状態ではなかった。ただ、こはねが出る直前にせめても、と思い無料配布のフライヤーだけは手に出来た。無くさないように持っていようと、1枚は冬弥のジャケットのポケットに畳んで入れる事にした。こはねはどうしようと少し悩んでいると、アイズグレイの瞳が情熱的に覗き込んでくる。

「あつ、あお、やぎくん……………」

『quiero estar contigo——』
「!？」

先程の2人が歌った曲で印象的だった、最も情熱的で唯一英語ではなかった歌詞だ。何故この単語を今出したのか、そして何故意味を知っているのか、聞いた事が多すぎるほどキャパオーバーになりそうだが、

かろうじて一言だけ絞り出せた。

「私も……………『あなたの傍に居たい』な」

火照る身体を何とか鎮めながらあの電車に戻った。

これだけ活気に溢れた街であれからずっとここに止まっているのも不思議で仕方ないが、今は現状を何とか呑み込むしかない。誰も乗っていない電車に2人が完全に乗り込んだ瞬間、また勝手に扉が閉まった。

ネオン街から遠ざかると、前方には再び長いトンネルが現れる——次は、どんな場所に導かれるのだろうか。